

プレイエル & エラール 200歳 記念
フォルテピアノ界 ☆期待の新星★

川口成彦 ピアノリサイタル

Naruhiko Kawaguchi

青春の日々から

2016年5月22日(日)

午後2時 開演

Cafe プレイエル 喫茶ホール

3,500円 要予約

(40名様限定)

お問合せ・お申込み

TEL 0263-92-8158

カフェプレイエル&ギャラリーやましろ

使用ピアノ in Paris
プレイエル No.174215 1923年
エラール No. 95463 1909年



program

- E.グリーク: 『青春の日々から』 op.65-1
W.A.モーツァルト: 幻想曲ハ短調 K.396
(M.シュタードラー補筆)
F.シューベルト=B.スメタナ: 好奇心の強い男
F.ショパン: 華麗なる大円舞曲 op.18
バラード第1番 op.23
F.プーランク: 3つのノヴェレッテ
M.deファリャ: 火祭の踊り
(バレエ『恋は魔術師』より)
C.フランク: 前奏曲、フーガと変奏曲 op.18
(H.バウアー編)
E.グリーク: ピアノソナタ op.7

川口成彦 プロフィール

東京藝術大学楽理科および大学院修士課程古楽科を経て、現在アムステルダム音楽院古楽科修士課程在学中。現代のピアノのみならず、フォルテピアノやチェンバロ、クラヴィコードといった歴史的な鍵盤楽器を用いても演奏活動を展開している。第1回ローマ・フォルテピアノ国際古楽コンクール(Mクレメンティ賞)優勝。ヘルフィンク国際フォルテピアノコンクール2015(アムステルダム)第27回国際古楽コンクール(山梨)入賞。2016年にはアムステルダム国立美術館にてスクエアピアノの演奏の録音が使用される。また「ゴヤの生きたスペインより」をテーマに古典期からロマン派初期におけるスペイン人作曲家の知らざる作品の演奏を精力的に行う。アンサンブルにおいても幅広く活躍し、これまでに小林道夫、佐藤俊介、サクストン・ローズ、サンドロ・カルディーニなどと共演。ボヘミヤの作曲家 J.L.ドゥシーク作品集のCDが BRILLIANT CLASIC より発売中



第52回 Café プレイエル&ギャラリーやましろ 定例コンサート

2016年 5月22日(日) 午後2時
於 カフェプレイエル喫茶ホール

プレイエル&エラール 200 歳記念

川口成彦ピアノリサイタル

～ 青春の日々から ～

program

- E.グリーグ： 抒情小品集 第8集 『青春の日々から』 Op.65-1
W.A.モーツァルト： 幻想曲 八短調 (未完) K.396 (シュタードラー補筆)
F.シューベルト=B.スメタナ： 歌曲集 美しき水車小屋の娘 より編曲 Op.1
『好奇心の強い男』
F.ショパン： 華麗なる大円舞曲 Op.18
バラード 第1番 Op.23
F.ブーランク： 3つのノヴェレッテ 1.ハ長調 2.変ロ短調 3.ホ短調
M.de ファリャ： バレエ 恋は魔術師 より 『火祭りの踊り』
C.フランク： 前奏曲、フーガと変奏曲 Op.18 (H.パウアー編)
E.グリーグ： ピアノソナタ ホ短調 Op.7

使用ピアノ Erard エラール No. 95463 1909年 in Paris
Pleyel プレイエル No. 174215 1923年 in Paris

主催: Café プレイエル&ギャラリーやましろ 松本市波田 3058-5

Tel 0263-92-8158

<http://www.cafe-pleyel.com/>

[facebook.com](https://www.facebook.com/)

「真実性」に憧れて

川口成彦 フォルテピアノ奏者 川口成彦

こんにちは、川口成彦です。宅配便のお兄さんには「しげひこ」と呼ばれていることが多いのですが、「なるひこ」という名前です。東京藝術大学の楽理科在学中に古楽の世界に魅了されて以来、西洋藝術音楽の学びがますます楽しくなりました。フォルテピアノを自分の音楽の学びの中心としていますが、モダンピアノやチェンバロもしっかりと演奏できる鍵盤楽器奏者を夢見ています。最近 私は「音楽およびその真実性」についてよく考えています。半年ほど前に、画家ダリの『ダリ・私の50の秘。伝一〜画家を志す者よ、ただ絵を描き給え』という本をパラパラめくっていた時に、ダリが10年かけて編み出した画家の価値分析表を目にし、その評価項目のひとつに掲げられていた「真実性」という言葉に感銘を受けたことがきっかけです。ちなみにこの「真実性」をダリの主観ながら完璧に満たしている画家は、ダ・ヴィンチ、ラファエロ、ベラスケス、フェルメールです。彼が絵において意味する「真実性」は音楽に関する議論には適合しないかもしれません。しかしこの言葉を拝借して、音楽およびその演奏における「真実性」について考えることはとても有意義だと思っています。そして自分の演奏は「真実性のあるものにしたい」と思うようになりました。

私が現在考えている「真実性ある演奏」というのは、「作曲家およびその音楽に可能な限り、高い次元で共感できている演奏」です。私は、いわゆるピリオド演奏というものの目的は音楽が当時に近い形で鳴り響くことそれ自体ではなく、そのことを通じて作曲者とより親密なシンパシーを生み出すことだと思っています。私は古楽と出会うまで特に古典派の音楽に対して何らかの距離感を感じていました。ハイドンの魅力にも気づけない悲しい時期がありました。しかし初めてフォルテピアノに触れた時に、ハイドンやモーツァルトなどが、ようやく微笑みかけてくれました。彼らの感情や思想、夢などがやっと色鮮やかに見え始めました。すれちがっていた友人と仲直りできた感覚とでも言いましょうか、とてもうれしかったです。その感覚は、「真実性ある演奏」への自分なりの最初の一步だったように感じています。当たり前ですが、私の演奏はまだまだ「真実性」溢れるものではありません。

知識および教養、人生経験、想像力などなど・「より高い次元の共感」に必要なことは山のようにあるでしょう。それらはこれからの人生でや培っていかねばなりません。けれど音楽は人生と共にある学びだと思うのでとても楽しく感じます。ちなみに「より高い次元での共感」は現代のピアノでも十分可能だと思います。けれど私自身「真実性」の探求において、やはり古楽器に身を委ねていきたいです。

ところで私は 楽理科在学時よりゆっくりですが、スペイン音楽の研究を続けています。高校生の時から、I.アルベニスやグラナドスをはじめとする近現代のスペインの作曲家に夢中になり、今では古典派からロマン派初期のスペイン音楽にもわたって興味をもっています。2014年の画家ゴヤの誕生日に開催した「ゴヤの生きたスペインより」や大学院の学位審査演奏会はオール・スペイン・プログラムに挑戦してみました。そして思いの外多くのお客様から「スペインのものって良いね!!」と感想をいただき、うれしく思いました。今後も微力ですが、スペイン音楽の魅力をお伝えできたらな、と思っています。そしてもちろん スペイン人作曲家以外も大好き!!なので、さまざまな作曲家とこれからも真剣に向き合っていきたいです。いつになるかわかりませんが フェルメールみたいになれるよう頑張っていきたいと思っています。